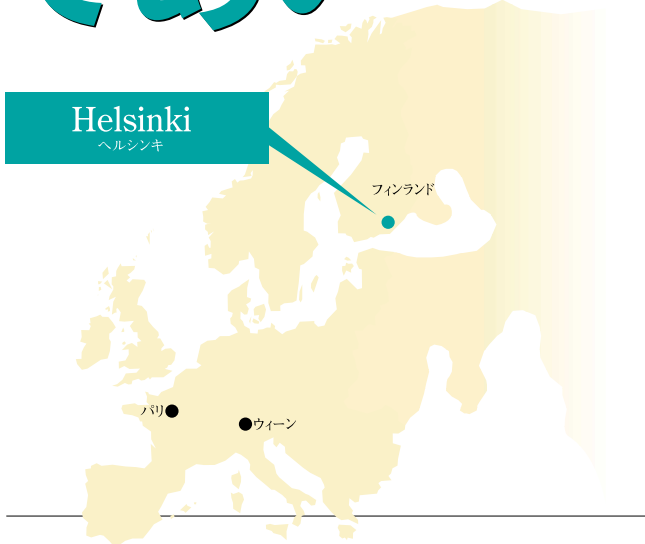


# 北ぐにでの

「ゆとろぎ」の民、ムスリム

## であい

中央大学総合政策学部  
教授 片倉もとこ



北の地は、人をひきずりこむような魅力をもっている。わたしは、仕事柄、南のほうに行くことが多くなってしまったが、実は北への想いや憧れも人一倍つよい。

神さまのやわらかい手(多分やわらかいとおもう)で、そおっと、おかれたような純白の雪が、まだあちこちに残っているヘルシンキの町におりたつたのは、春浅い午後だった。北欧の国々でもイスラームがひろがり、ムスリムたちが集まるモスクがあちこちでできているという情報をえた1980年代のはじめごろだった。どんな様子なのか直接みてみたいとおもい、バルト海を船でわたり北欧におもむいたのだった。



パリの通りを行くムスリムの女性たち

らってきたが、さて、どこにあるのかしら。スマートな電車をおりて「出口」と書かれているところから外にでる。ひんやりした清潔な北の空気が快い。

最近、パリでもウィーンでもロンドンでも、ベールをかぶったムスリムの女性たちの姿をみかけるようになった。肩に大きなビデオカメラをかつぎ、街の撮影に余念のないムスリム女性にであったこともあった。しかしヘルシンキの街角で、こんなに早くベールの女性にであうとは思っていなかった。「ああやっぱり、ここにもイスラーム教徒が…」知らない町で知っている人にあつたような気がして思わず駆けよつた。

イスラームはネットワーク文明といわれる。ムスリムたちは、よその国のモスクについても知っている人が多い。カナダのバンクーバーでモスクの横にあるイスラーム学校の先生をしている友人から、ヘルシンキのモスクのありかをおしえても

「アッ・サラーム・アライクム」

彼女は驚く風もなく、「アライクム・サラーム」普通に挨拶をかえしてくれた。エジプト人だという。よけいうれしくなつた。なつかしいエジプトなまりのアラビア語ではなす。こちらは日本人だということちょっと驚いたようだったが、「モスクにいきたいのだけけど…」という、「いっしょにいきましょう」と、連れ立って歩き出してくれた。「ああよかった。彼女もモスクに行くところだったのだ。こんなに早く道を知っている人にてあうなんて」と、ほつとしながら、ならんでヘルシンキの街を歩く。彼女はカイロの病院の女医さんだそう。近年のイスラーム社会には意外なくらい女医さんが多い。女性の患者には女医の方がいいといわれている。わたしも男医?に体をみてもらうよりは女医さんのほうが気楽で自然体でいられる。カイロなどの都会でも意外に大勢の女医さんたちが医師のプレートをつけた車を運転して颯爽と活躍している。医師の車はどこに駐車してもよいという法律がある。

ザイナブというこの女医さんは、弟がヘルシンキに留学しているので、休暇を利用してたずねてきたのだという。昨日カイロからここにきたばかり、モスクにはまだ行ってないという。なあんだ。じゃあ私と同じように道をしらないんだ。エジプトやイラクなどイスラーム社会の街角で、道をきくと知らなくても、「あつちだよ。いっしょにいこうか」と、ついてきてくれたりする人が多い。道を知っているかどうかより、迷っている人を助けたい、親切心が先だつてしまう優しい人たちだ。「あいつたちは知りもしないのに、いいかげんに道を教えたりする」と、機嫌を悪くするアメリカ人や日本人もいる。「知っているのか知っていないのか、イエスかノーかを明確にするべきだよ」たしかにそうかも。が、イエスとノーの間に存在する「もやもやしたもの」を大事にするといった文化もこの地球上にはあるのだ。

いつそやのマスカット(オマーン)では、市場のなかで、すっかり道に迷ってしまったわたしを、魚を買って自宅に帰る途中のおば